

「介護過程」授業研究（2年目の取り組み）

－リアクションペーパーから見る学生の理解過程－

The Study of Teaching “Care Process” (Second Years Work)

-Understanding Process of the Students from Their Reaction Papers-

根本 曜子¹ 古川 繁子²

介護福祉士養成課程の新しいカリキュラムが始まり、「介護過程」が独立した科目となった。本年度は新しいカリキュラムの2年目となり、2年課程の初めての「介護過程Ⅱ」がスタートした。前年度の課題として出た教員間のコンセンサス作りの取り組みと、「介護過程Ⅱ」の授業を検証した。今回は受講した学生にリアクションペーパーを書かせ、それを分析していくことで、学生の介護過程を理解するプロセスを追うこととした。この考察から、学生にとっては介護過程展開シートを書くことは大変難しいことがわかった。また、本稿にまとめたことで、学生が書くことの理解に留まり、利用者理解をした上で利用者の状況に適した介護を考えるまでに繋げるにはさらなる工夫が必要であることがわかった。

キーワード：介護過程、利用者理解、リアクションペーパー、理解過程

1. はじめに

介護福祉士養成が1988年に始まって以来、2000年と2009年の二回にわたり、カリキュラムの改正が行われた。一回目は介護保険制度開始と介護サービスの質を高めるため、指定時間総数が1500時間から1650時間に増え、介護保険法の居宅介護支援および施設介護サービス計画について追加されることになった。そのため、社会福祉援助技術演習の授業で「介護計画」を学生に学ばせることとした。二回目の改正で1650時間がさらに1800時間となり、「介護過程」が独立した科目となり、150時間必修となった。そのねらいは厚生労働省のカリキュラムによると「他の科目で学習した知識や技術を統合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、適切なサービスの提供が出来る能力を養う学習とする」というものである。

本学の介護過程は図表-1の通り、150時間のうち、1年次後期30時間の講義、2年次前期事例による演習60時間、2年次後期チームアプローチについて

図表-1 介護過程授業の構成

科目と時期	形式	時間数
介護過程Ⅰ 1年次後期	概論 講義	30時間
介護過程Ⅱ 2年次前期	事例による演習	60時間
介護過程Ⅲ 2年次後期	チームアプローチについて演習	30時間
介護過程Ⅳ 2年次後期	事例研究 演習	30時間

の演習30時間、実習から持ち帰った事例研究で演習30時間から構成される。1年目の取り組みは昨年専攻科の前期に行われた「介護過程Ⅱ」について報告をした。その中で今後の課題として、ねらいにあるように「他の科目で学習した知識や技術を統合して」とあることから、介護過程の担当教員間は勿論、他科目の教員との間でも随時ミーティングを持つ必要を感じていた。

本年度は新しいカリキュラムの2年目となり、2年次の新しい科目がスタートした。前年度の課題として浮かんだ「介護過程」の授業担当教員間のコン

1, 2 植草学園短期大学

センサスを作るため、「介護過程」担当の教員間でおおむね週1回ミーティングを開き、そこに介護総合演習担当教員が加わる機会も持った。「介護過程Ⅱ」の担当教員は自分の担当事例以外の授業においてもグループワークのスーパーバイザーとして参加し、各授業を振り返り、確認、検討しながら進めた。2年生前期で行った「介護過程Ⅱ」の授業ではいくつかの事例を使って、情報収集、分析、解釈、統合化、課題の抽出、目標設定、計画立案、実践、評価を演習した。それらの流れの理解や方法の習熟がどのようにされていったか、振り返ることにより、事例の選択、時間の割り振り、効果的な説明方法や時期などが見えてきた。今後の介護過程の演習授業をどのように展開していくか、視座を得たいと授業研究に取り組み、日本介護福祉教育学会で発表したものに加筆した報告である。

2. 方法

60時間を4人の教員で分担し、3事例を使って行った。3事例とも2コマ続きで4回合計16時間8コマの授業を行った。その中で本報告者が担当した事例では、受講した学生に授業内容、質問、感想をリアクションペーパーに書き、その授業の終わりに提出させた。そして、翌週、学生にフィードバックしていくことにした。リアクションペーパーはA5用紙で1年次から本報告者の授業で使用してきたものである。これを利用することにより、毎回の学生の理解度を確認し、次回授業の進度設定をしていくことが出来る。毎回担当教員間で回覧し、コンセンサスを取ることに結果として利用した。そして、今回はここに書かれた内容を分析することによって、学生の介護過程を理解するプロセスを追うことにした。

3. 授業の概要

「介護過程Ⅱ」のねらいは様々な事例における介護過程の実践的展開を行い、利用者の状態状況に適した介護を考えるということである。授業は60時間の中ではじめに、1年次の概論の復習を行った。その後、脳性麻痺の障害者T氏の事例、次に、本報告者の特別養護老人ホームで生活する高齢者H氏、3番目にパーキンソン病の高齢者M氏の事例を使

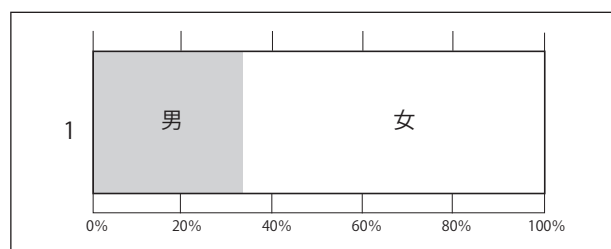
って、ワークシートを作成していく授業を行った。最後の2コマは学生のグループ討議を通して、介護過程の習熟度を自己評価する時間とした。事例担当教員は3名で、オムニバス方式で事例毎に授業を担当した。(図表-2参照)

図表-2 介護過程Ⅱの構成

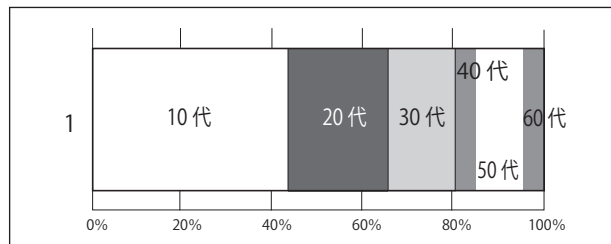
時間数	内容
8時間	1年次の実習を振り返りながら介護過程Ⅰの復習、介護過程Ⅱの導入
48時間	事例による演習16時間×3事例 1事例 2コマ連続4時間×4回 T氏：脳性麻痺の障害者 H氏：特別養護老人ホームの高齢者 M氏：パーキンソン病の高齢者
4時間	事例演習の振り返り

クラス構成は人数37名で、内訳は男子12名女子25名。(図表-3)年代別で見ると10代17名、20代8名、30代5名、40代2名、50代4名、60代1名である。(図表-4)それを年齢、性別など偏らないように考慮した4つのグループに分け、教員4名がそれぞれ入り、随時、グループワークを取り入れ、グループ発表を織り込み進めていく。なお、ワークシートⅠ-1、Ⅰ-2、Ⅰ-3は「新・介護福祉士養成講座9『介護過程』介護福祉士養成講座編集委員会、中央法規出版」から、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳは従来本学の実習で使用していた用紙を用いた。

図表-3 クラスの男女比



図表-4 クラスの年齢構成



1) 事例

本報告で対象とし、授業で使用した事例は本学の卒業生が在学中の実習で実際に展開したものである。個別介護過程を展開した既卒生(以降、実習生と称す)に授業での使用について許可を得て行った。事例のHさんは実習中に特別養護老人ホームに入所してきた女性。統合失調症、狭心症、糖尿病、白内障、軽度の認知症の既往歴があった。実習生は自分の実習のはじめに入所してきたHさんが気になり、介護過程の対象者とした事例である。(資料1, 2)

2) 授業の展開

①第1回目

事例紹介と情報整理をした。個人で介護過程ワークシートI-1(フェイスシート)、I-2(情報整理)に記入し、グループに分かれて、読み合わせをした。予定ではワークシートI-3の情報の解釈・統合化と課題の抽出(アセスメント)までだったが、途中までとなった。実習生が記入したものに本報告者が加筆したI-1、I-2の解答例を配布し、各自見ておくように指示した。

②第2回目

グループに分かれて、情報の解釈・統合化と課題の抽出の続きを話し合った。各グループ毎のワークシートI-3を作成した。出来上がった各グループのシートをその場でクラス人数分印刷し、配布した。その後、ICFに基づく、利用者の分析、課題、可能性を書き込むワークシートII、全体像と目標を考えるワークシートIIIを作成した。書き終えなかった学生もいたが、実際に実習生が作成したものを印刷配布し、各自見ておくように指示した。

③第3回目

グループに分かれ、ワークシートIV(計画と実施、評価)を用いて、グループ毎の目標を設定し、計画を立案、それを発表した。

④第4回目

実習生が実際に行った展開事例を示し、グループ毎に評価をし、発表を行った。

4. 授業毎の感想

①第1回目の感想

1事例目の「T氏の時より書けるようになった」という内容のものが6名あった。一方で、「アセスメントが難しい」というものが15名いた。しかし、その中でも「事例をたくさんやってアセスメントに慣れたい」「アセスメントすることは難しいと感じていたが、アセスメントすることの重要性が分かった」など、積極的に取り組もうという姿勢が見られる。また、「事例を読み取り、介護過程を展開していく楽しさが少し出てきた」「H氏の事例をまとめていくうちに、やり方が分かってきた」「前回までは手探りだったが、今回は理解できそうな気がする」「前は課題から始めたが、情報の精査から初めて、情報から導き出されるいろいろな解釈の違いにより、課題が違ってくることがあり、新鮮だった」など、理解の糸口も見出している感想があった。

②第2回目の感想

「人それぞれの考え方があるので、大変だったが、自分一人では気づけなかったことも気づけてよかった」「話し合えば合うほど、課題や目標が出てきて、話し合いは大切だと実感した」「皆で話を進めていくうちに実際にH氏の目標作りに参加している気持ちになった」というグループでの話し合いについての感想と、また「グループ毎の結果を見たら、それぞれ違った解釈があって興味深かった」「各グループのアセスメント表を見て、こんなに視点が違うのかと改めて思った」など、グループ同士での影響しあっている様子が感想として書かれていた。グループワークで進めていくことについての効果が感じられる感想が多かった。一方で、「時間が足りなかった」「進行が早かった」というものもあった。その中でも「実習生の展開がとても参考になった」「生命レベルの大切さがわかった」「参加レベルや活動レベルの違いがわかった。わかると楽しい」「前回の事例よりスラスラ書けた」など、理解が深まっていることがわかる。

③第3回目の感想

「一人で作業を進めていたら、時間的には早く終わるが、独りよがりの偏った内容になるので、グループの意見交換の大切さを再認識した」「目標としていることはどのグループも似たようなことだった

が、計画方法がまったくちがうので、勉強になった」など、グループ内での話し合いとその後の発表は「介護過程」理解について、効果的であることがわかる。また、「はじめに比べるとまとめられるようになって来て、成長してきてる」「みんなで話し合っ、少しだけアセスメントが理解できた気がする」など、はじめは理解できていなかった学生からも、理解が進んできている感想が出てきた。「たくさん意見が出てきて、次々とアイデアが出てきた」「目標を明確にすることで計画も立てやすい」など積極的になっている様子もうかがえる。「今やっていることは1年の時の授業の内容がまとまっている」という、介護過程の意義を見出しているものもあった。

④第4回目の感想

「評価が感想になってしまう」といった内容のものが4名いたが、「この計画を立てた実習生はとても実りのある実習であったと思った。感心することが多かった」「自分が計画、実施、評価する時留意しようと思った」のように実習生の事例であることの効果が出ている。「ちゃんと出来ていてすごいと思ったが、評価してみると準備不足な面や対応が出来てない所があると気づいた」「その施設の職員の目線の評価も聞きたかった」「評価はその人の価値観が表れていると感じた」と評価に対する理解をしていることがわかる。

⑤その他の感想

「個人差が大きくて、話し合いにならない感じがした」「グループ替えはないのですか」「意見を言う人が決まってしまう、マンネリ化している感じがする」など、グループワークに対する不満、要望があった。一方で、4回の授業で理解に至っていないと思われるものもあった。

⑥リアクションペーパーの質問とその対応

リアクションペーパーは毎回、次の授業までに4人の教員で回覧し、感想にコメントを加え、質問に対しては、各教員が対応し、次の授業で各学生にフィードバックした。「実習で実際に行う目標設定は、あくまで実習期間中に行えそうな内容で記入するのか」や「短期目標の評価と日にち毎の実施の評価とどちらがよいのですか」などの質問が書かれていた。質問のうち学生全体にさらに説明が必要と判断

した場合は次の授業の始まりに、解説をした。

5. 考察

授業では1回目は事例紹介と情報シートに書き込みながら、情報を整理させ、本人の気持ちやケア者の気づきなどを書くことで、アセスメントにつなげていったが、2回目は情報の統合化と課題の抽出を主として行い、3回目で目標設定、計画立案、4回目に評価と、個人作業やグループ討議を適宜重ねていく方法で、一連の介護過程の展開を行った。各回で書かせたリアクションペーパーの感想からは2事例目であるということ、アセスメントの具体的なやり方がわかってきたり、前回は理解までに及ばないものの、だんだんに理解に到達する楽しさを味わっている様子うかがえた。

学生にとって、介護過程展開シートを書くということが大変難しいものであるということがわかり、そのことから、演習事例を複数用いて展開演習を重ねることで理解を深めていく過程が見えてきた。また、個人作業だけでなく、他の人の意見を聞くことが出来るグループワークの効果が大きいことが分かった。最後にいくつかの質問に対応することが一層の介護過程の理解を助けるチャンスであることが理解できた。また、グループワークに馴染めない学生、最後まで理解に至らない学生については、グループ人数の検討、教員4名の担当の工夫、個別の対応指導の必要性などの課題が見えてきた。

また、「介護過程Ⅱ」の授業においては介護過程の書き方を理解させることその他、利用者の思いとありのままの姿を学生が理解するところには至らず、時間が必要であることが明らかになった。

本稿をまとめることによってさらに明らかになった点は利用者の思いとありのままの姿を学生が理解して、利用者の状態状況に適した介護を考えること、学生がそこまで到達するには、全体の時間配分を考え、さらなる工夫が必要であるということである。その1点目は第1回目の授業で情報整理のシート、第2回目は全体像と目標を考えるシートについて書き込む時間が不足、回答例のプリントを見ておくように指示した。このことがこの事例の利用者の全体像を理解するまでに至らなかった要因と考えられる。それには3事例毎のねらいと到達目標を明

らかにし、それぞれに重点をおいた事例学習をする。2点目は学生に理解させるために、教員が事例内容の検討をし、指導内容を共有化していくことである。また、学生が紙の上での理解だけでなく、実際の利用者理解に繋がっていくためには、「介護過程Ⅰ」の段階で、情報の判断、解釈、関連づけ、統合化などについて効果的な説明方法で十分な理解をさせること、「介護過程Ⅱ」においても演習しながら、利用者理解について、時間の割り振りの中で1コマ程度の授業の必要など、介護過程Ⅰ～Ⅳまで全体を通しての構成の検討をしていく方向性が見えてきた点である。

引用・参考文献

- 1) 根本曜子 古川繁子 (2010) 『『介護過程』授業研究』第17回日本介護福祉教育学会発表要旨集 p.58-59
- 2) 厚生労働省 (2008) 『介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて「求められる介護福祉士像」』
- 3) 介護福祉士養成講座編集委員会編集 (2009) 『新・介護福祉士養成講座9「介護過程」』中央法規出版
- 4) 一番ヶ瀬康子監修 (2000) 『新・介護福祉学とは何か』日本介護福祉学会編 ミネルヴァ書房
- 5) 石野育子著 (2000) 『最新介護福祉全書別巻2「介護過程」』メヂカルフレンド社
- 6) 石野育子著 (2008) 『最新介護福祉全書7【介護】「介護過程」』メヂカルフレンド社

資料1 特養で楽しく生活したいと思うHさんの事例

◆事例 特養で楽しく生活したいと思うHさんの事例

●事例の概要

氏名：Hさん

性別：女性

生活環境：特別養護老人ホーム（4人部屋）

入所年月日：平成21年10月1日

生年月日：1929年10月24日

要介護度：要介護2

認知症高齢者の日常生活自立度：II a

障害高齢者の日常生活自立度：A 1

●家族構成および生活歴

T県生まれ。3人兄弟の真ん中の長女として出生。兄、弟がいる。幼年期はT県の下町で育つ。幼稚園、保育園などで勤務していた。独身。55歳の時に統合失調症を発症。現在は服薬で安定している。

●入所前の生活状況および入所に至った理由

独身で独居であったが、65歳でケアハウスに入所。9年以上生活していたが、入居者間でトラブルがあったため、退所。他のケアハウスに入所。その後、糖尿病、狭心症を発症し、平成20年に大腸がん手術のため、退所、入院。退院後は主に兄の妻が介護していたが、兄弟達も高齢で、今後の介護をする事は困難と考えられ、特別養護老人ホームのショートスティ、ミドルスティを経て、入所。

●現在の状況

・健康状態

認知症：軽度

糖尿病：服薬あり。食事制限（1200カロリー）現在は安定している

狭心症：服薬あり。現在は安定している。

便秘傾向：緩下剤を服用。

精神状態：統合失調症は服薬により安定している。

両足の浮腫が見られる。

視力：白内障のため、視力の低下が見られる。目の前のものしか見えない。眼鏡使用

聴力：会話には支障がない。

・ADLの状況

移動：自立しているが、歩行時、立位とも、ふらつきがあり、見守りが必要

身じたく：自立で見守り

食事：刻み食。自立摂取。入れ歯使用（上歯全部、下歯部分）。食事制限1日1200カロリー塩分6グラム。嚥下に問題なし。食べるのが早い。

排泄：自立。トイレにて排泄しているが、紙パンツ使用。自立しているので、排便の確認が難しい。

入浴・清潔保持：自立見守り。

睡眠：よく眠れている。

コミュニケーション：問題なし。視力の関係で近くにいる人となら、よく会話をする。

・経済状況：年金の他に預金がある。

・最近のHさんの様子

施設内の学習療法に参加し、運動会を楽しみにして、参加した。日中はディルームで静かに過ごしている時間が多い。表情が硬く、眉間にしわを寄せている。本を読むことが好きと言っている。幼稚園の勤務経験があり、ピアノを弾くことが好きだと本人が言っている。

(実習生の事例より著者作成)

資料2 実習生の実際の展開

●実習生の実際の展開

【長期目標】 施設で楽しく生活する

【短期目標①】 ピアノの練習をすることが出来る

【計画】 ピアノを弾くことが出来ることを伝える

ピアノを弾く時間を作る。ピアノを弾いてもらう。

【実施】 10/7 実習生「今度、ピアノの練習をしましょう」

Hさん「自分のエレピアンを持ってきているの。どこにあるのかしら」

10/11・午後のレクの時間にピアノ（キーボード）の前に座ってもらった。自然と指が動くのか、何か言う前に自分から弾き始めた。はじめはつかえつかえ弾いていたが、何回か弾くうちに指もスムーズに動いていた。

Hさん「楽譜がないからわからない」

・施設の小さな楽譜を見せた

Hさん「よく見えない」

・職員の方がピアノに合わせてハーモニカを吹こうとしたが、Hさんは自分のペースでピアノを弾き続け、ハーモニカに合わせて弾くことはできなかった

“新しい情報” 10/27 誕生会が行われる！

【分析解釈】 誕生会でピアノを弾いてもらうという目標ができれば練習にも励みがつき、前向きな姿勢になる可能性が考えられる。

【課題】 他の入居者の前でピアノが弾くことができるか。

【短期目標②】 施設の行事（誕生会）でピアノを弾くことができる。

【計画】 ・誕生会があることを告げ、そこでピアノを演奏してもらうことを伝え、了承してもらう。

・演奏をする曲を決めてもらう。

・練習してもらう。

・誕生会でピアノを演奏してもらう。

【実施】 10/21 実習生「誕生会があるのですが、そこで、ピアノを発表してみませんか？」

Hさん「えっ、本当？でも、もっと練習しなくちゃ」

実習生「何の曲を弾きましょうか？」

Hさん「『エリーゼのために』が好きで弾きたい」

実習生「じゃ、弾いてみましょうか」

Hさん「でも、楽譜がないから・・・覚えてはいるのだけれど・・・」

10/27 誕生会

Hさん挨拶「これからも切磋琢磨して、ピアノの練習をしていきます！」

・ケーキが来るまでの時間にピアノを弾いてもらった。

・『歌の町』を弾き始めた。弾きはじめは「よい子がすんでる、よい町は・・・」だったが、途中から『たき火』に変わっていた。

・ケーキを食べ終えた後も、何度も弾いていた。

・誕生会の後・・・実習生「よかったですね。ちゃんと弾けていましたよ」

Hさん「そう？」満面の笑み！

(実習生の事例より著者作成)